言いたいことばかり

高橋義孝

新潮文庫

言いたいことばかり

定価320円

新潮文庫 草227=2

昭和五十六年四月十五日 印刷
昭和五十六年四月二十五日 発行

著者 高橋義孝

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四四〇
振替東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊫ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社
© Yoshitaka Takahashi 1981 Printed in Japan

新潮文庫

言いたいことばかり

高橋義孝著

新潮社版

2721

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I
夏の客……一三
教養……一三
悪口……一五
機械と日本人……一七
割れ鍋に綴じ蓋……一九
真ん中が抜けている……二〇
大学のPTA……二三
人間の気持……二四
我不関焉……二六
教授会万歳……二七
犬と仙人……三〇
旅館の禅味……三三
温泉のこと……三八
下りない幕……四二
グシて殺して……四四
能と現代生活……四六
紐の呟き……四八
與話情浮名横櫛……五一
II
先生の憂鬱……五四
変化する日本語……五六
これからの日本語……五八
読みたい本は読ませる……六一
青年と読書……六三
春本と文学作品のちがい……六六

わるい文学趣味……六八
国語学者の錯覚……七〇
杓文字で水を汲むの愚……七三
言葉づかい・声・文章……七五
言葉のこと……八六

Ⅲ

「あら、あたしが」……九〇
弁慶の泣きどころ……九四
聖母マリアと売春婦……九九
女性は虫籠である……一〇三
休日亭主の扱い方……一〇七
浮気はありえない……一一一
どんな女房が一番こわい……一一五
男は敵討ちしない……一二〇
女性のご損になる話し方……一二四
男ごころ鑑別法……一二八
女ッ気好きと女好き……一三三
ひがし男山、にいし女川……一三七
やきもちは男の特技……一四一
旅の男の心理状態……一四五
男は照れ性である……一五〇
芋づるドン・ファン……一五四
出張に御注意……一五八
「アナタガダメナラ」……一六二
女の歳と男の禿頭……一六七
芝居心のよしわるし……一七一

若い男女の仏頂面……一七六
女に悪人はいない……一八〇
別れは重大である……一八四
Ⅳ
焼き蛤の哲学……一九二
平凡な下物について……一九四
一列横隊……一九七
わが『食いしん坊』……二〇一
宿酔の記……二〇五
正月・酒・女……二〇八
白状すれば……二一〇
酒飲み十戒……二一三
ちょっと遅すぎた……二一五
秋口の盞……二一七
symphonie de すしだね……二一九
夜ごとの酒……二二一
おすしの神様……二二四
三都の酒……二二八
餓鬼道より……二三一
心太 ラムネ 氷水……二三三
秋茄子 さんま 新芋……二三六
おでん 燗酒 うどんかけ……二三九
浅漬 天丼 チャンコ鍋……二四二
鉄ッちり 蒲焼 山の芋……二四五
ラーメン カツレツ
ライスカレー……二四八

V

海の呼び声……二五二
ものの名……二五四
『昔』の記憶……二五六
ある寒い朝……二五八
ぼくの修学旅行……二六〇
供奴……二六二
恋愛の落第生……二六四
厳粛なる浮気……二六八
男の姿……二七〇
ぼくより若い人に……二七二
巨視と微視……二七四
鬼神の悲運……二七七
落ちていた将棋の駒について……二七九
言葉のともしび……二八九
人生いかに生くべきか……三〇八
あなた任せ……三一〇
そういうもの……三一二
あるいは雨の暁に……三一五
あとがき……三一七
解説　外山滋比古

言いたいことばかり

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

夏の客

暑いので、ちとしゃれた飲み方をしましょうと思って、名代のそば屋へ出かけて、ざるそばで一杯やっていると、若い男女のふたりづれが入ってきて「天どん、二つ」と注文した。

注文を受けた店の者が、いったん料理場へ引込んでから、また客のところへ戻ってきていうには、天どんはもう御飯がないから一人前しか出来ない。すると女の方がこういった。

――仕様がないわね、じゃおそばで我慢しておくわ。

おそばといっても、天ぷらそばのことにちがいない。名代のそば屋で「じゃおそばで我慢」されては、そばは泣き、のれんが可哀そうだったが、ふと店のすみを見ると出前持ちと女中さんとがキスしていた。ああそうか、こういうことでは「じゃおそばで我慢」する客があるのも当然だと自分の気持を訂正した。

それから四、五日して、これも一寸(ちょっと)おいしいすし屋の飯台の前で、すしダネをさかなに一献やっていたら、若い男女の五、六人づれがどやどやと入ってきてイス席に陣取った。その中の一人、マンボ・スタイルの青年が、飯台のうしろですしを握っている職人に声をかけた。

――おーい、何かくれよ。

職人が「へい、何をつけましょう」といったら、

――何だい、すし屋にきて、すしを食わないやつがいるかよ。握りだよ。

とその青年は答えた。何をつけましょうというのは、握りのタネは何にするかの意であることは明らかであるが、かの青年はどう誤解したのだろうか。そうしたら、ぼくの横にいた五十位の浴衣がけのおやじが、うしろを振返って、すごい眼つきでその青年をにらんだ。

陽気も暑いが、客も暑くるしい。

教　養

若い女のひとばかり集まったところで、少々話をしたことがある。私の話が終ってから、ひとりの若い女のひとが「教養をつけるのにはどうしたらよろしいでしょうか」と私にたずねた。その言葉の調子に私は、荒れ性の肌にはどういう白粉（おしろい）をつけたらいいでしょうかとでもいう質問のようなものを感じた。自分がここにいる。向うに「教養」とかいうものがある。自分がそこまで出かけて行って、その「教養」とかいうものをちょいと持ってきて、帽子か何かのようにひょいとかぶればそれで教養がつく、といったような気味がその質問の背後に感じとられた。

私思うに、教養とはそんなものではあるまい。身につけるというようなものではあるまい。外

国小説の翻訳をやたらに読むというようなことでもあるまい。いろいろのことをよく知っているというようなものでもあるまい。器用に煙草をふかしてみせるというようなことでもあるまい。音をさせずにコンソメ・スープをすするというようなことでもあるまい。品のいい、静かな踊り方をするというようなことでもあるまい。私ははっきりと申し上げるが、教養をつけるとは泣面をすることである。ぽろぽろとくやし涙を流すことである。不安で不安で、居ても立ってもいられぬような思いをすることである。

私は高等数学を全然知らない。しかし高等学校の一年生のときには習った。ところが不勉強のせいもあって、ひどく数学の成績はわるかった。そのために落第しそうになった。それでもどうやら及第して、第二学年に進んだ。

そのときのことをいまだに夢に見る。やはり数学の試験の時間で、問題がひとつもできない。これができなければいよいよ落第だと、それこそ居ても立ってもいられない。世間態、親の心配と叱責、それやこれやを思うとどうにもならぬ。眼がさめる。すると、ああ己は高等学校はもとより、大学ももう卒業していたんだ、ああよかったと、心からほっとする。

それほど高等学校の数学にはらはらする思いをさせられた。あのはらはらする思いをしたという経験、あれが教養というものだろう。何十年も経ってから、夢の中にまたぞろ出てくるほどの心配不安、あれが教養というものだろう。読んでいて、どうしても意味がつかめず、原著者を馬鹿野郎呼ばわりし、自分の頭を自分でなぐりつけ、くやしく、残念で、ぽろぽろ涙をこぼす、これが教養というものだろう。

教養とは、そんなふうにしてついて行くものだろう。教養とは、つまりはたから自分が地面にたたきつけられて痛い思いをすることによってのみえられるのである。教養とは、そういう痛い不愉快なものであるから、痛い不愉快な目に会うまいと思う人は、教養をつけたいなどとは思わぬ方がよろしいと考える。

悪口

人と生れて、たのしみの数も多いが、人の悪口をいうたのしみはまた格別のものではあるまいか。悪口を思う存分にいっていると、かゆいところを恥も外聞もなくかいているときのような、なんともいわれぬ快味がある。なにをいってもかまわぬ相手を眼の前において、第三者の悪口をいうことを禁ぜられたなら、それこそ「腹ふくるる」仕儀に立至るであろう。人生の快楽の一つに、悪口をいうことを数え入れても、うわべはとにかく心ひそかな賛成なら数多くえられるだろうと思う。

ところで鷗外がどこかで、紳士というものはその人の面前で口に出せぬようなことは、その人のいないところでも口には出さぬものだという意味のことをいっていたと記憶する。一方において悪口をいうことのなんともいわれぬ快味を承認する私は、他方においてこの鷗外の意見に大いに賛成せぬわけにはいかぬ。なるほどそれでこそ人間の世の中であろう。それでこそ人はみな意

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com